

洛友会会報

京都大学電気系専攻内
洛友会
〒615-8510
京都市西京区京都大学桂
075-383-7014
www.rakuyukai.org

未曾有の困難に遭遇して

洛友会会長

長尾

真(昭34年卒)



新年おめでとうございます。今年も洛友会の皆様にはお元気にご活躍されますようお祈り致します。

昨年はいよいよ大変な年でありました。3月11日の東日本大震災は日本の地震観測史上最大のM9.0の地震と、それに伴う未曾有の津波、さらに不運なことに福島原発の大事故が起ったことによって、世界に大きな衝撃を与えました。またこれらを含む多くの問題に対する対応のまずさから菅内閣が倒れたこと、中国その他の国からいろいろと圧力をかけられ続けたこと、

米国が主導する環太平洋経済連携協定(TPP)に参加するか否かの日本の将来の命運をかけるであろう問題、日本円の極端な上昇に伴う国内の企業や経済の問題、タイの深刻な洪水被害と日本を含む多くの世界企業への打撃、EUにおける債務危機など、数えあげればきりがありません。

地球は現在地殻変動期に入っていて、インドネシア、チリ、トルコにおける大地震、さらには米国の今まではほとんど起こったことのないフィラデルフィアの近くでも大きな地震が起こるといったことになり、この地殻変動があと何年続くのか大変気がかりであります。福島原発の事故は想定外のことです。このようなことは今後ますます起こらないだろうと言っています。普通の事故はいわば一

過性のもので、場所的にも限定されるのに対し、原子炉の事故は常に臨界状態という危険にさらされ、これがうまく制御できなくなると、核爆発が起こり広範囲の地域を汚染し、その影響が少なくとも数十年続くということになりますし、そもそも原子力発電においては使用済燃料の後始末ができず、永久に溜まってゆき、これを常に監視し制御し続けてゆかねばならないという、まるで人間に避けて通れない業のようなものを抱えねばならないということであり

ます。今回の災害は千年に一度のものだと言われています。その出来るだけ速やかな復旧、復興のために寄付をしたりボランティア活動をするともに、このような稀有な災害の記録、また復旧、復興の足跡の記録、被災者の発言記録、その他を徹底的に集め、将来のための参考に供することが大切であります。そこで国立国会図書館としてこの災害の記録を集め後世に伝えることの意義、重要性を図書館職員に説くとともに、このような大事業は国立国会図書館だけでは出来ませんので、関係各省庁に呼びかけて連携しながら記録の収集作業を行いはじめております。たとえば今回の災害の記録における1つの特徴は、個人や報道関係

者、国や地方自治体などが撮った津波や被災地の映像がぼう大にあることであります。これらはデジタルカメラで撮られているので、被災者からの聞きとり記録、その他を含めてデジタル化された記録として震災アーカイブを構築し、学術研究はもとより、教育、その他に使えるようにしようというわけです。

内閣府、総務省、文部科学省、経済産業省、国土交通省、環境省、その他の省庁の関係者、またボランティアで記録を集めている人達との間に連絡会をもうけて、重複せず、できるだけ多くの各種記録を集め、デジタルデータとすること、そしてこれらを国立国会図書館をポータルサイト(窓口)として利用できるようにしようと検討しております。これには何年もの地味な努力が必要ですが、百年先、千年先の人達にも役立つものになるであろうことを確信しております。

この事故を契機として思想面では現代文明とは何だったのかという深刻な哲学的課題が我々につきつけられ、文明の転換点に我々が立たされている、つまり我々がこれまで抱いて来た価値観に反省

迎春

二〇一二年一月一日

本 部 役 員

会 長 長 尾 真

副 会 長 田 村 和 豊

松 田 晃 一

松 重 和 美

支 部 長

関 西 辻 村 順 一

東 京 塩 見 正

中 部 根 石 信 行

中 国 松 井 三 生

四 国 四 宮 幸 生

九 州 深 堀 慶 憲

北 陸 松 木 純 也

東 北 井 上 茂

北 海 道 中 山 道 夫

本 部 幹 事

木 村 磐 根

鈴 木 実

北 野 正 雄

小 野 寺 秀 俊

をせまられているという事態が生じて来たといつてよいでしょう。たとえば我々電気・電子工学関係の出身者にとつては、これからのエネルギー問題をどう解決してゆくかという課題を文明的立場に立つて考えてゆかねばならなくなつたことでありますし、もっと広い立場に立てば生命科学を含む科学技術を今後どこまでどのように発展させてゆくべきかということにもかかわります。人間のもつ無限の欲望をどのようにして制御し、押さえてゆくかという課題でもあります。このような大きな課題については誰も簡単に結論を導き出すことは出来ないでしょう。これから10年、20年かけて検討しながら世界全体の考え方を変えてゆくことが必要であります。

私は1980年代から21世紀は知の時代から情の時代へ、科学技術の時代から心の時代へ変わってゆくだろうと言っていました。どうやらそちらの方向に具体的に移つてゆかざるをえないところに來つたように思われます。その中で我々科学技術者、工学者はどのようにしてゆくべきかを皆がそれぞれに考えながら手探りで進んでゆくことになるのでしょうか。私は昔父から「どんな人でも今たとえ平穩な生活を送っているとしても、一生に少なくとも一度は非常な困難に遭遇する。常にそれを覚悟し、その時のために心を鍛えて準備しておくことが大切だ」と言われましたが、日本としては第二次世界大戦での敗戦と、ひよつとすると現在がそのような時なのかもしれません。我々はこの困難を耐え抜くという覚悟が必要と考えます。



（免税措置あり）して母校の大学、学科のより一層の発展のために貢献することが大切と存じます。今年も予測しない諸々の出来事が起こるでしょうが、洛友会の皆様には忍耐力と寛容の心をもってこれら乗り越え、新しい時代に向かつて進んでゆかれることを期待いたします。



教室だより

エレクトロニクス・サマーキャンプ報告

模型工作や電子工作などの工学的な経験をほとんどしないまま大

学に入學する学生が増えている。彼らは、電気電子工学の専門科目の面白さや社会の接点（製品やサービスに使われていること）について思いが及ばず、電気電子工学に対する興味や学習意欲になかなか火が付かない。学科としてのこの問題は重大と考え、様々な取り組みを行っている。その一つが、夏休み期間を利用して電気電子工学の面白さや魅力を体験することを目的としたイベント、「エレクトロニクス・サマーキャンプ」である。4年目となる今年、9月28～30日の日程で吉田キャンパスにて実施した。このイベントは、単位は付与せず、学生本人の自発的意志で参加する形式を取っており、対象は研究室配属前の1～3年生である。

電子開発学園 北海道情報大学

理事長 松尾 泰

宇宙技術開発

代表取締役社長 松尾 泰

鐵 S C C

代表取締役社長 松尾 泰

パナソニック

鐵

電気関係教室

教員一同

迎春

二〇一二年一月一日

ている。以前にサマーキャンプに参加した学生が、4年生や大学院生となり、TAとして運営を手伝うようになるなど、学生(TA)が主体となった運営が軌道に乗りつつある。

キャンプと称しているが、実際に宿泊するわけではない。ただ、時間を気にせず、仲間とコミュニケーションを密にしてキャンプの気分が充実した時間を過ごそうという意味でこの名称を使っている。毎年恒例となっているが、最終日前夜は、多数の学生が徹夜で製作・調整に取り組んでおり、彼らとそれに付き合ったTAにとっては名実共にキャンプとなっている。各学年の課題は以下の通りである。

1 回生「LEGO Mindstormsによるロボット製作」

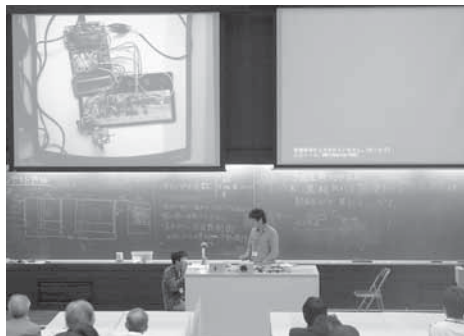
これまでではロボットを単独で動かし、タイム・スコアを競う競技であったが、今年是对戦形式の競技を導入した。TA達が考案したオリジナル競技「マクスウェルの悪魔」を課題に設定した。これは熱力学の有名なパラドックスをモチーフにした競技である。ロボットは、自陣を巡回しながら減点ボールである赤玉(-1点)と得点ボールである青玉(+1点)の色の識別をし、赤は排除(相手陣地に

送り込む)、青は確保することにより自陣のボールの合計点を高めるように設計される。試合は、赤青3つずつを各陣地に配置したところからスタートし、3分経過した時点での各陣のボールの合計点を競う。この課題に、9名が4チームに分かれて取り組んだ。対戦形式ということもあって、白熱した試合が繰り広げられた。特に、赤玉を相手コートに送り込んだので大逆転の際には場内から大きな歓声が上がった。総当たりのリーグ戦と上位2チームの決勝戦を行い、優勝チームと準優勝チームを表彰するとともに、独創的なロボットを作ったチームには「うけたDE賞」が授与された。



2 回生「Programmable System-on-Chipを使って音のでもものを作ろう」

アナログ、デジタル機能ブロックを内蔵するワンチップマイコン(Cypress PSoC)を用いて、音の装置を自由に作るというテーマに16名の学生が取り組んだ。(2回生の課題は個人で取り組む。)最初の1日は、実習を含むPSoCの集中セミナーが開催され、2日目からは、学生個人毎に各自のアイデアを実現すべく製作に取り組んだ。技術、アイデアに優れた多数の作品がコンテストで披露された。最優秀賞は、非常に多機能で完成度の高い電子メトロノームが選ばれた。優秀賞には、PSoCの



アナログ機能ブロックを使ったエフェクターが選ばれた。他に、技術賞、アイデア賞、特別賞、協賛のCQ出版社トランジスタ技術編集部から「トラ技賞」が授与された。

3 回生「ヘリウムガスで浮かぶ飛行船の無線制御コンテスト」

昨年から始まった飛行船の姿勢・軌道を無線自動制御するコンテストである。2回目となる今年は、コース上に配置されたゼムクリップを飛行船からぶら下げた磁石で釣り上げるという課題に、8チーム28名が取り組んだ。最終日のコンテストでは、方向制御と高さ制御をうまく組み合わせるゼムクリップを釣り上げていく各チー



迎春
二〇一二年一月一日

電気評論社

財団法人

近畿地方発明センター

理事長 壽榮松 憲昭

公益財団法人

応用科学研究所

株式会社
田中プリント

迎春
二〇一二年一月一日

ムに、会場は大いに盛り上がった。コンテストの結果、合計得点の高かった2チームを優勝・準優勝として表彰した。また、審査員による評価が高かった1チームには技術賞が、そして特別賞として、協賛の日本ナショナルインスツルメンツ(株)より「NI Graphical System Design賞」が1チームに授与された。

今年は、昭和41年卒業生の同窓会がサマーキャンプ初日夕方に時計台で開催されることになっていたので、同窓会にさがけて、電気電子工学科の学生実験の設備とサマーキャンプの見学会を実施した。電気系の大先輩方に、サマーキャンプで学生達が真剣に課題に取り組む様子を見て、電気系の将来が明るいと喜んで頂いた。サマーキャンプへの同窓会としての見学希望があれば、相談下さい。最終日のコンテストは大変面白いです。洛友会会員の方にはオープンですので、是非、コンテストを見に来て頂ければと思います。(中高生のお子さん、お孫さんがいれば一緒にどうぞ。京大電気系を目指したいと言いつつも知れません。)

平成23年度電気系教室懇話会懇話会報告

平成23年度電気系教室懇話会が、教員、学生、ならびに卒業生他約140名の参加者を得て、11月18日(金)に電気総合館大講義室で開催された。電気工学専攻長の小林哲生教授が司会を務められ、ご講演に先立って、電気電子工科学科長の小野寺秀俊教授が挨拶をされた。その後、講師に招かれた、吉川榮和名誉教授(昭和40年電気工学科卒)、株式会社エネゲート代表取締役社長多山洋文氏(昭和48年修士課程電気工学専攻修了)、KDDI株式会社代表取締役社長田中孝司氏(昭和54年電気工学科卒)のお三方より大変興味深いご講演を頂いた。講演の概要は以下の通りである。

「中国大学風景 一北京、大連、ハルビン」

(吉川榮和 名誉教授)



先生は京都大学在職中より原子力やヒューマンインタフェースに関する研究を行われており、電気系の講義としては『発電工学』や『原子力工学』、『マンマシンシステム工学』を受け持たれていた。これらの研究に関連し、これまで中国の清華大学、大連理工大學、ハルビン工程大学に滞在・訪問されている。今回はそこで経験したことや感じたことについて紹介して頂いた。

まず、それぞれの大学の歴史について紹介された後、中国の教育制度についてご説明頂いた。中国の大学では学院(日本でいう学部)では現場技術者を養成するような教育を重視しており、研究院(大学院)では研究者育成を目指したカリキュラムが組まれているように感じられたとのことである。大連理工大學には2006年に客員教授として滞在され、週2回の授業を2か月間受け持たれたが、大連には日本系の企業が多く、大学でも日本語を第2外国語として推奨していたため、先生の著書『ヒューマンインタフェースの心理と生理』を教科書として、日本語で講義されていた。また、滞在中の残りの時間は、大連で教える子が興じたベンチャー企業にて、「ディベート支援システム」の開発に従事されており、実際にその

システムを用いて、大連大にてディベートを実施され、ご帰国後にも京都・北京間で国際学生ディベートを企画・実施された。

次に、中国の原子力研究の動向についてご説明頂いた。現在、中国における原子力発電の平均稼働率は30.5%で、建設中の発電所も数多くあり、2020年にはアメリカに次ぐ世界第2の原子力大国になる見込みであるとのことであった。

また大学における原子力研究も推進され、アメリカのWestinghouse社の加圧水型原子炉AP1000を基に、より安全性を高めた高出力の原子力発電の研究が進んでいることを紹介して頂いた。

現在、先生はハルビン工程大学において特別招聘教授として教鞭を執られている。この大学は中国全大学の原子力学科の教育レベルを国際水準にまで向上させるためのIAEA-CAEA支援プロジェクトの世話大学となっており、中国の原子力学科では最大の学生数を誇る。中国では、博士課程のみならず修士課程の修了要件にも国際ジャーナルへの論文の採録が必要とされ、国際レベルの研究者を育成することに積極的に努めている。これからの日本の学生には、この成長著しい中国との交流の仕方について考えてほしいとのことであった。

「スマートグリッドが拓く低炭素社会」

(多山洋文氏)



まず、今回のご講演の主題として、「スマートに進化し続ける電力ネットワーク」ということを挙げられ、100年以上前から進化してきた「スマートグリッド」という考え方について、ご説明頂いた。第二次産業革命以降、電力ネットワークは量(安定供給)・質(高信頼度供給)ともにスマート化が進んでおり、21世紀においてはエネルギーセキュリティ(Energy Security)、経済成長(Economic Growth)と環境保全(Environmental Protection)の3Eの調和が必要とされ、電気エネルギーの発電、流通、利用のスマート化(スマートグリッド)が望まれていることを、日本、特に関西における電気事業の発展に絡めて解説して頂いた。

多山氏が在籍しておられた関

西電力では、1985年に配電総合自動化構想(元祖スマートグリッド)と高度情報通信システム構想を同時に打ち立て、電力ネットワークと電力通信ネットワークを一体的に構築してきており、また一般家庭での省エネを目指し、2001年にはNEDO補助事業として松下、日立とHEMS実証プロジェクトを立ち上げられ、家庭内CO₂排出量を9.1%削減する効果を実証されたことなど、世界に先駆けた技術開発を行われていたことをお話し頂いた。その構想から四半世紀経った現在では、通信ネットワークの整備(FTTH、無線の普及等)が進み、電力ネットワークの双方向化、エネルギーの情報化による新たなスマートグリッドへの道筋が出来上がってきており、それを用いた電力用ICTの可能性についてご紹介頂いた。

現在、世界各国ではそれぞれのニーズに合わせたスマートグリッド計画が立てられ、日本では再生可能エネルギー導入の促進に加え、省エネ・電力ピーク抑制への効果も期待されている。これに関して、低炭素化に向けスマートメータや太陽光発電、電気自動車などの導入に伴う種々の課題に対応するために、京都大学の電気・電子・通信・情報系の研究室が共

同研究を行っている実証プロジェクトや、エネゲートが新たに建設した「スマートラボ」での実証実験に加え、住友電工や三菱電機も地元関西で活発に研究に取り組んでいることをご紹介させて頂いた。これらの技術で日本は元より、アジア全体の低炭素社会の実現に貢献し、日本の成長につなげたいというお話を伺った。最後に会場からの質問を受けて、現在スマートグリッドについては百家争鳴、多種多様な意見があるが、市民一人一人の考えや行動がスマート(3Eの調和)になることが低炭素社会の実現につながっていくだろうとのこととお話を締め括られた。

「通信事業のこれから」と 「これから」

(田中孝司氏)



田中氏には、通信事業のこれまでの発展と今後についてご紹介頂

き、また学生に対して社会に出てからの心構えなどをご自身の体験を踏まえながら講演頂いた。

まず、KDDIが6月頃から始められた「adp」という起業を支援するプログラムについてご紹介頂き、プログラムに応募してこられた方々の中には学生の姿も多く、リスクを負っても起業し自分の想いや技術を世に問うんだという彼らの気概に触れ、感銘を受けたことをお話し頂いた。それに関して、ご自身が米国スタンフォード大学に留学された時の、熱意を持った学生が会社を興し挑戦する姿を目の当たりにされたご経験から、日本の若者にももっとアグレッシブに挑戦してほしいとの思いを語って頂いた。また、管理職になられた時や会社の合併時、現在の社長としての苦労話もご披露して頂きながら、学生に対しては就職活動時の会社選びのポイントについてもお話し頂いた。

次に、通信事業のこれまでと今後ということ、入社してからの30年間の変遷についてお話し頂いた。これまでの独占から競争、携帯電話の発展からモバイルイン

述べて頂いた。

講演会終了後、吉田南キャンパス生協食堂で約150名が参加して懇親会が開催された。司会は電子工学専攻長の野田進教授が務められた。小野寺秀俊電気電子工学科長の挨拶、木村磐根名誉教授の乾杯の挨拶に始まり、懇親の時間約1時間30分を挟んで、最後に西川禪一名誉教授の挨拶と最後の言葉で解散した。



◎退職記念行事のご案内

松重和美教授におかれましては、来る平成24年3月31日付けで定年を迎えられることになりました。左記の通り、先生の最終講義ならびに記念行事を開催することになりましたので、ご案内申し上げます。

松重和美教授 最終講義のご案内

日時…平成24年3月2日(金) 午後3時00分～午後4時30分
場所…桂キャンパス 船井哲良記念講堂
題目…「未開分野への挑戦」

「分子エレクトロニクス、産学公連携、起業教育」
連絡先…林田知子秘書

TEL…075・383・2307

e-mail : hayasida@piezo.kuee.kyoto-u.ac.jp

研究室HP : <http://piezo.kuee.kyoto-u.ac.jp/>

※最終講義終了後に同館1Fのホールにて懇親会を行います。

松重和美教授 退職記念講演会および祝賀会のご案内

松重和美教授 退職記念講演会および祝賀会は平成24年5月27日(日) 京都大学吉田キャンパス百周年時計台記念館で開催予定です。

お問い合わせは、最終講義と同じ連絡先までお願いいたします。

会員寄稿

自転車の練習

平岡 正憲

(平10年卒 中国支部)

卒業後、地元の電力会社に就職して10年以上が経ち、私も二人の子供の親となりました。今回は子育ての話に絡めて近況を書きたいと思います。

今秋の初め、5歳の息子に自転車の乗り方を教えようと思い立ちました。既に、昨年末には「来年は補助輪なしで自転車に乗れるようになるうね」と、目標を立てていたにもかかわらず、日々の生活に流され、手つかずのまま気がつけば秋になっていました。共働き家庭で、土日を含めてあまり相手ができていませんが、息子の信頼、尊敬を得ることを目指し、年内には目標を達成したいと考えました。

風呂の中で息子から聞き出したところによると、友達の中にも数名、補助輪なしで乗れる子がいるようです。子供の認識範囲でも数名ということは、かなりの割合で既に乗れているようにも思えます(雑誌記事によると、多くの子供が小学校入学前には乗ることができるように

す)。

私自身の記憶がよみがえってきました。子育てのいい点の一つは、子供の成長とともに、同時期の自らの記憶が時折鮮明によみがえることです。自分がどのように練習したかは不明ですが、5歳(年中)で補助輪が外れ、周囲の子供の中では比較的早く乗れるようになった私は、「補助輪の片側だけを外し、(長期間)乗っているうちに自然とバランスをとれるようになる」という独自の練習方法を考案し、数人の友達とその親にレクチャーした記憶があります(彼らは実施していました!)。5歳の子供にとって、自転車に乗れるかどうかは重要事項だったようで、あの子は年中で乗れた、あの子は小学生になっても乗れなかったなどと、意外と鮮明に覚えています。また、自転車の練習に父親が付き合ってくれて、少しうれしかった記憶もあります。

すこし調べたところ、近年推奨されている練習方法は「ペダルを外して、地面を足で蹴り、まず、バランスをとって進むことを覚える」という方法のようです(もちろん、補助輪は両方外します)。ペダルを外す、というのは非常に新鮮に感じましたが、この方法なら親が自転車を

保持しなくても子供が自立でき、自分でバランスをとる練習ができるため、親にとっても楽なようです。

自転車店で補助輪とペダルを外し、スタンドを付けてもらった後、早速練習開始です。自転車店から家までの帰り道、息子には地面を蹴りながら帰らせました。ヘルメットを着けているとはいえ、見事に数回、転倒し、200メートルくらい離れた我が家につくころには汗まみれになっていました。私が同じように転倒すれば骨折するかもしれないと思うくらい派手に転倒するのですが、まだ体が軽く、柔らかな子供は大丈夫のようです。平日には練習できないため、次の日曜日に、近所の公園で20分ほど「地面を足で蹴って進む」練習をさせました。感覚がすこし身についたようで、下り道ではうまくバランスを取って「乗る」ことができていました。

さらに次の日曜日にペダルをつけて乗らせてみたところ、少し手伝っただけで、いきなり見事に乗ってくれました。実質的な練習時間ごくわずかですが、非常にあっけなく乗ってくれたので大変驚き、(一瞬ですが)わが子ながら誇らしく感じました。私のかつて考案した「補助輪

を片側だけ外す」練習方法は、長期間かかるうえ、結局乗れるようになれるか少し疑問ですが、「ペダルを外す」練習方法はバランスをとれるようになるうで理にかなっており、効果的だと思います。

「自転車の乗り方を教える」と言えば、一般的には、補助輪を外してバランスを取って走れるようにすることではないかと思えます。しかし、実用的に自転車に乗るためには、身につけなければならないことが他にも多数あります。最近、自転車の運転マナーが問われる事例を耳にします。結局、歩道を走っているのか、など、判断に迷うこともあります。周囲に気を配りながら余裕を持って乗れるように、今後も声をかけてい



きたいと思います。

なわとびや鉄棒の逆上がりなど、小学校に入学する前だけでも、子供には身につけてもらいたいことが多数あります。昨年、妹が生まれて以降、少しさみしくさせているかもしれないと思うのですが、できるだけそばにいて支えていきたいと考えています。

自転車雑感

甲斐島 元

(平13年卒 関西支部)

近年、健康面や環境面において注目を集め、さらに最近では東日本震災においても自動車に代わる交通手段として脚光を浴びた、自転車について私の思うところを書きます。

私が自転車に入れ込み始めたのは、大学に入ってからです。今はどうかかわらないですが、入学式のときに大量に各クラブ・サークルなどから勧誘ビラを配られました。そのときは、ただ漠然と運動するクラブに入りたいたと考えていただけでありましたが、その日家に持ち帰り見ていましたところ、そのビラの一枚に目が留まったのであります。数あるクラブ・サークルの中からそのクラブに一目ぼれし、早

速、翌日説明会に行き入部した次第です。のちに、この選択は誤っていなかったといえます。まず、第一にかけがえのない仲間ができたこと。そして、自転車に出会えたことであります。

よく、「同じ釜の飯を食った仲間」といいますが、本当に同じ釜の飯を食べて自転車旅行に出かけたものです。長いときには、夏休みに1ヶ月、日本各地を自転車で駆け回りました。夜は野宿が多く、コッヘル(携帯できる鍋)などを使って、料理を作り、食べ、酒を飲み、語り合い、(当時は自宅から大学に通っていたため、家族よりも)濃厚な付き合いをしていました。社会人になった今でも、各地に散らばった仲間が関西に来るときは会ったり、こちらから会いに行ったりすることもあります。社会人になった今だからこそ、本当にかげがえのない仲間であることを実感しています。

そして、自転車については、社会人になった今でも天気の良い日には週に1回は乗っておりまして、ストレス解消と健康増進の一翼を担ってくれています。中堅社員になりつつある身には、特にストレス解消について、大いに貢献してくれているといえます。現在の住居のそばには川



が流れており、そのサイクリングロードを走っているときや走った後には、仕事のいやなことも忘れさせてくれ、さらに前向きに仕事に取り込もうという気持ちになれる。最近妻も巻き込んで、一緒に走りに行くようになっていた次第です。また、健康についても毎年の健康診断で異常がない状況です。

しかしながら一方で、一部のマナーの悪い自転車が社会問題になっている面もあります。私が自転車に乗っていて、たまに出会ったのが逆走する(車道の右側を走る)自転車です。車道の左側通行は、車両としての基本的なルールの一つであるにもかかわらず、自転車に関しては意外に守られておりません。逆走行為は、私のように左側通行を遵守している自転車に本来必要のない回避を強いるうえ、ひどい場合には正面衝突や後続の自

動車との追突を招く危険があります。さらに夜間で無灯火の場合は最悪です。ほかに歩道を走る自転車と歩行者のトラブルなどもあり、実際、何度かヒヤリとさせられた経験をもたれた方もおられるかと思いますが。

このように問題も少々ありますが、自動車・バイク・自転車・歩行者など各自が基本的なルールを守れば、トラブルにならないものが多いと信じております。今後とも安全運転で、人の輪を広げたり、健康増進をはかったりするために、自転車に乗っていかうと思っております。

我が社の名物行事

木村 優

(平18年卒 中部支部)

中部の自動車会社に就職し、ハイブリッド自動車の開発に携わって4年目になります。当初は、「ハイブリッド自動車の開発に携わって」というタイトルで技術的な話を書こうかとも思っていたのですが、今回は、本日(12月4日)行われた我が社の名物行事を紹介させていただこうと思います。

私の会社にはおそらく他にはないであろう名物行事があります。それは、毎年12月に開催さ

れる全社あげての駅伝大会です。私もつい先ほどこの大会に出場し、ぐったりしながら原稿を書いているところです。

駅伝大会では、各部署でチームを編成するのですが、その規模はとても大きく、この日のために東京や海外から参加するチームもあるほどです。ちなみに、今年の出場チーム数は477チームでした。また、その歴史は古く、昭和22年に開催された第1回大会から数え、今年で65回目となるそうです。

会社行事とはいえ、これだけ大きな行事ですから、皆、練習には相当な力を入れています。7月を過ぎる頃になると、お昼休みの会社周辺の道路はランナーで溢れかえるようになります。お昼休みは12時〜13時の1時間なのですが、12時のチャイムが鳴ると同時に更衣室に駆け込み、ランニング用の格好に着替えます。2〜3キロ走った後は、休む間もなく、汗をダラダラと流しながら食事を済ませ、13時には仕事のできる状態です。この光景を見れば何事かと思うことでしょう。私も入社当初はこの光景に驚いたのですが、今ではすっかり慣れてしまいました。当初、お昼休みの練習直後は、そうめんやそばくらいしか喉を通らな

かったものですが、今ではとにかくや熱い豚汁も平気で食べられるようになりました。

また、大会が近づく10月や11月頃になると、会場となる陸上競技場で各チームがタイムトライアルを行うようになります。ここのタイムで選手選考が行われるため、休日であるにもかかわらず、皆朝早くから競技場に集合し、選手となるべく必死の形相で走っています。一度に大勢の人が集まるため、競技場周辺の道路が渋滞することもしばしばです。

ところで、私自身、走ることはあまり好きではありません。おそらく、独りで練習していたらとても続けられないでしょう。そんな私でも続けられている理由、また、大勢の人が参加する理由、それは、仲間との交流・親睦を深めることができるという魅力があるからだと思います。

私のチームでは、入社1、2年目の若手から部長までが一緒になって切磋琢磨し、練習しています。また、練習後にはバーベキューや飲み会をすることもあり、世代を越えて仕事とは違う面での人間関係を構築することができるとなっています。

駅伝大会本番では、さらに人と人とのつながりを感じるこ

ができます。ただ走るだけなのですが、襷をつなぐために一人ひとりが任された区間で全力を出し切る。全員で最後まで襷をつないだときの一体感、達成感は何事にも代えがたいです。しかし、駅伝本番の魅力はこれだけではありません。

競技場内は人が多いため、前走者を確認することができず、襷の受け渡しに失敗するチームも見られます。私のチームではこのようなことがないよう、チームの仲間やサポーターの人たちが沿道の各地点で走者の位置を確認したり、到着予想時間を計算

したりして襷の中継をサポートしてくれれます。本番で失敗することがないよう、計画や準備は数日前から、お昼休みや終業後の時間を割いて行われます。職場の仲間と一緒に目標を成し遂げるといふ面白さがあります。

また、沿道はスタートからゴールまで応援者で隙間なく埋まっています。応援席は部署毎に区画分けされているのですが、自部署の前を通過するときには、名前を呼んで声援を送ってもらえます。こんな興奮の中走れるレースは他にないと思います。



筆者です

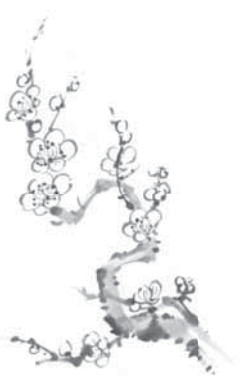


今年で65回目です

これが他人に自慢できる我が社の名物行事です。写真でその規模と感動が伝わるでしょうか。



規模の大きさが伝わるでしょうか



同窓会だより

卒業50周年記念同窓会

電気・電子工学科卒業50周年記念同窓会を、2011年11月11日にウエスティン都ホテル京都で開催しました。1961年に82名が卒業。11名が他界され、4名が体調不良などによって間際に欠席となりましたが、33名が出席。宴会をはさんで4時間あまり、現役の頃の仕事や勤務先にこだわりがちな話から一転して、各人の個性や立ち位置が反映された日常、訪れた国々やその言語論、歴史観、技術論まで、蘊蓄のあるところが飛び交い、話が弾みました。東日本大震災の折から電力論議も関心事となりました。

翌12日は京大のホームカミングデー。思い思いに、懐かしさやとどめつつも今日風に衣替えしたキャンパスを訪れて、講演会などの行事に参加、卒業時にはなかった博物館、公開された清風荘を見学するほか、京都の秋を楽しみました。

石黒武彦 記



京都大学電気・電子工学
卒業50周年同窓会
2011年11月11日
於 ウエスティン都ホテル京都

昭和39年卒者同窓会

我々昭和39年電気・電子工学科卒業生で所在確認している者73名はこれまで五年ごとに同窓会を開いてきたが、平均余命も後15年程度となった開催間隔を縮めたらということになり、卒後45年と50年の中間本年11月13日(日)に関東在住者が初めて幹事となり箱根湯本の富士屋ホテルで5時半から開催した。九州、山口等から駆けつける者、大病の合間に出席する者等、参加者計42名。出席率58%の高出席率であった。今回初めて夫人同伴者が2名いたが高齢化に伴い今後増えるであろう。全員集合写真を撮った後宴席。留岡幹事長が「原子力温存は今非国民の扱いだが、日本の将来生きる道、エネルギー・食料等のリスク、自然環境との調和・雇用問題など、総合大学を出た我々は複眼的に捉えるべきだ」との挨拶があり「：確かな明日はないのだから」というバックスの歌を引用し乾杯。

卒後初めて会う人達もお話は弾んだ。余興として在学時分の京都検定なるものを行った。授業料は9千円だったと覚えていたが百万遍の角のパチンコ屋の名前を覚えていた者は少なく、吉田神社にいた動物の正解が「鹿」だったとシカとは知らない人が多かった。

た。話したい者のスピーチでは絵描きのセミプロ、スキュウバダイビングでこの夏撮った海中写真の紹介など異色の話も興味深かった。琵琶湖周航の歌・逍遙の歌を歌って散会。殆どの者が宿泊し、二次会もカラオケそっちのけで大いに談笑。ただ、年のせいか、酒量が激減したとか。

翌日は17名が富士屋仙石ゴルフコースへ。好天に恵まれ、コースの環境も素晴らしく、ゴールドティを導入したこともあり殆どの者が各個人の最近の平均値より好スコアとなり、総満足度は非常に高かった。エイジシューターを目指した人もいたが、小島君の詳細な過去のデータ分析で絶対本命と目されていた林君が優勝。しかし1・2位を的中させたのは48票中の1票だけだった。2位を当てるのは難しい。

散策組は14名。秋の暖かい日差しを浴びながら、箱根旧街道を閑所跡まで歩き、芦ノ湖名物の海賊船に乗って、大涌谷など散策。1個食べれば7年長生きできるという名物の黒たまごに手を出す人もなく、紅葉を楽しみながら清遊。次回は平成26年(2014年)卒後半世紀(50周年)記念同窓会を、京大時計台下で盛大にやろうということになった。

留岡 寛 記



昭和41年卒同窓会

昭和41年卒業45周年同窓会を8月28日京都大学吉田で開催した。午後3時から電気系教室見学、午後5時半から時計台2階の国際交流室で宴会という段取りである。電気系教室見学の参加者は26名で、まず、旧電Ⅱの建物2階の教室で北野教授(工学研究科評議員)、小野寺教授(電気電子工学科長)から昨今の大学事情を伺ったあと、須田淳准教授から学生実験とサマーカーンプ[洛友会報231号(平成23年1月)又は227号(平成22年1月)参照について説明を受けた。そのあと、3班に分かれ、須田准教授に加えて斉藤啓子助教、後藤康仁准教授に案内していただいて、学生実験室とサマーカーンプを見学した。卒業以来、京大の電気系教室へ来るのは初めてという御仁もいて、建物・設備や教育内容の変わり具合に興味津々の体であった。午後5時半からの宴席には32名が参加、各自近況を紹介しているうちにあっという間に終了時刻を迎えた。年齢の割に健康家がそろっており、用意した料理がなくならないか、幹事が気をもむほどであった。次回の再会を約し午後7時半に閉宴、三々五々京の巷に散っていった。

荒木光彦 記



支部だより

中部支部総会報告

平成23年6月18日、名古屋の名鉄グランドホテルにおいて、会員24名の参加を得て中部支部総会を開催しました。本部からは松重和美副会長、教室からは松山隆司教授にご出席いただきました。

議事は根石支部長の挨拶に始まり、前年度事業・決算報告、今年度事業・予算計画審議が行われ、全会一致で承認されました。また今年は2年毎の役員改選時期となるが、現役員全員が留任することで承認されました。

総会に引き続き、松重副会長から洛友会本部の現況報告、また松山教授から桂キャンパスと電気系組織の現況、平成22年度卒業生の進学就職状況等について説明がありました。松山教授からは、「エネルギーの情報化によるスマートエネルギーマネジメント」節電率保証付き省エネシステムの実現」と題し、東日本大震災に伴う電力需給逼迫への対応にも有効なものとして、スマートタップを活用した実証試験などについて講演もしていただきました。スマートゲリッドに関する様々な研究や実証試験が進められている中での、家

庭内ナノ・グリッドとしての先端技術の紹介であり、全員大変興味深く話を聞かせていただきました。

また松浦幹事から、3月の浜岡原子力発電所全機停止要請に伴う夏の電力需給逼迫状況について説明をしました。この後、記念写真撮影、懇親会へと移行しました。酒井副支部長の乾杯でスタートし、その後今年の新入会員から始め、参加諸氏に自己紹介・近況報告をしていただき、最後に自費製作された三高歌集を全員に提供いただいた石川進先輩のリードで「逍遙の歌」を合唱して散会となりました。

なお、今年度の中中部支部活動は以下の通りです。

◆秋の例会…11月12日(土)
徳山ダム、横蔵寺見学

◆懇親囲碁大会…10月中旬

◆懇親ゴルフ会…貞宝CC
平成24年4月7日(土)

多くの会員諸氏のご参加をお待ちしています。

総務幹事

松浦昌則(昭53年卒) 記



第96回関西支部

ゴルフ競技会報告

△プレー状況▽

第96回関西支部ゴルフ競技会が平成23年10月15日(土)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

前日の大雨にもかかわらず当日は天候に恵まれ、アウトは福川氏(昭和30年卒)、インは細田氏(昭和36年卒)の始球式でプレーを開始し、合計19名(うちシニア8名)が競技に汗を流されました。

結果は以下のとおりです。

(シニアの部)

優勝 平嶋 正芳 (S38年卒)
2位 北野 徹 (S44年卒)
3位 細田純一郎 (S36年卒)

(一般の部)

優勝 杉本 卓 (S50年卒)
2位 丹羽 彰 (S48年卒)
3位 福田 隆 (S57年卒)

△懇親会▽

プレー終了後、福田氏(S57年卒)の司会により、表彰式兼懇親会が開催されました。

表彰式では、入賞者に景品および優勝カップが手渡されたあと、

入賞報告を頂くとともに、関西洛友会ならびにゴルフ競技会の更なる発展を期待するコメントを頂きました。

△お知らせ▽

洛友会関西支部では同窓生の懇親を深める機会として毎年2回(春・秋)にゴルフ競技会を開催しております。次回は平成24年5月19日(土)を予定しております。若い方も含めて、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

△連絡先▽

関西電力株式会社

福田 隆 (S57年卒)

小蒲 義夫 (H17年卒)

連絡先

050-7104-0924 (小蒲)

ogamayoshio@b3.kepeco.jp

関西支部

家族見学会報告

洛友会関西支部では、恒例の家族見学会を10月29日(土)に開催しました。本年は80名の参加をいただき、兵庫県播磨科学公園都市にある世界最高性能の放射光施設「Spring8」とわが国初の「X線自由電子レーザー施設(SACLA)」、そして姫路城を訪れました。

大阪駅傍のハービス広場前をバス二台で出発し、「Spring8」のキャンパスに到着の後、施設の運営管理をされている(財)高輝度光科学研究センター(JASRI)の方々に案内いただき、まずは放射光普及棟についてVTRの視聴を交えながら世界の放射光施設「Spring8」の産業利用事例、「SACLA」の計画などについて説明をいただきました。

説明の後には、再度バス二台に分乗し、一台は「Spring8」から一台は「SACLA」から順に見学しました。広大なキャンパスをバスで巡回する間にも車窓から望む両施設のスケールの大きさに感銘を受けました。そして「Spring8」蓄積リング棟では一周千四百メートル余の円周から放たれるビームラインの利用施設などを見学し、「SACLA」では全長四百メートル

にも及ぶ加速器を制御する機器等の稼働に向けた調整が進められている様子を見学しました。

世界に誇る施設を前にして参加者も興味津々の様子で、JASRIの方への質問は予定時間をオーバーして続きました。

その後、播磨科学公園都市から程近い先端科学技術支援センターの交流サロンで昼食を取り、会員相互の親睦を図りました。

午後は姫路市内まで戻り、姫路城に向かいました。

現在、姫路城では半世紀ぶりの大改修工事が進行中ですが、大天守を覆う素屋根内部に修理見学施設「天空の白鷺」が設置され、この時にしか見ることができない世界遺産の様子を見学できます。この施設は好評を博しているようで、この日も多くの観光客に混じっての見学となりました。高層階の見学フロアーから見る漆喰壁の塗り替えや屋根瓦の葺き直しの様子、エレベータから間近に見る石垣などの見慣れぬ光景に、参加者からも非常に面白いとの声が聞かれました。

最後に他の城内施設や城に隣接する庭園「好古園」などを自由に見学した後、帰途につきました。

朝8時前に大阪を発ち、到着は19時頃という長時間の行程になりましたが、天候にも恵まれ、実り

の多い一日となりました。

一木将人(平7年卒)記



本部だより

平成23年度

第2回先輩と学生との

交流会報告

昨年10月29日土曜日に桂キャンパス船井講堂において洛友会と電気系教室の共催による「先輩と学生との交流会」が開催されました。午前中に企業の実業から5分間のショートプレゼンテーション、午後はブースでの個別説明と意見交換、その後、先輩を講師とする講演会、最後に懇親会が持たれました。この日は生憎関西支部の家族見学会とち合ってしまった、ご迷惑をお掛けした会員の方にはお詫び申し上げます。今年度は、経団連の倫理憲章が12月1日以前の採用活動を自粛するように求めたことがあり、辞退する企業が多くあり参加企業は昨年の半分の23社にとどまりました。学生の参加者数は

2 回生	1 名
3 回生	16 名
4 回生	9 名
修士1 回生	61 名
修士2 回生	2 名
博士1 回生	2 名
博士2 回生	3 名
博士3 回生	2 名

でした。学生は1回生から博士課程まで全学年が対象となっております。最近の電気系学生は目的を持た

ずに入学してくる者が多く、せめて3回生が配属研究室を決定する前にその動機付けとして参考にしていただきたいということも趣旨の一環です。そのため、吉田キャンパスからバスを1台チャーターして学部学生の参加者を募りましたが利用者は8名で、結局学部からの参加者は26名にとどまりました。参加者のアンケートでは、学生も企業の方も、今回くらいの規模のほうが説明も意見交換も



多くで
きて良
かった
という
感想を
頂きま
した。

計報

講昭11	福田 卓平	23・7・25
昭18	長谷川泰一	23・7・2
昭24	太田 實	23・10・2
昭24	久保 隆信	23・2・28
昭25	中山 清光	23・12・3
昭47	玉江 裕明	23・6・27
昭48	山口 純司	23・5・26

以上の方がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

東日本大震災から九ヶ月が経過しました。まだ復興の目処が立たず被災者は多くの方々が苦勞されておられると思います。昨年4月号にも書きましたが一日も早い復興を願って已みません。

これまで会報には東日本大震災に関する寄稿はまだありませんが、今号の巻頭言で長尾会長が言葉に寄せられております。会員に甚大な被災を受けた方がおられなかったことは良かったと思います。小生は今年度の大震災と福島原発事故をきっかけとして多くのことを考えさせられました。行政に関することは多くの場所を取り上げられている通りだと思います。特に外国からの評価は真摯に耳を傾ける必要があると思います。

原発事故では技術者の責任のことがあまり報道されませんが、東京電力や経済産業省には多くの技術者が採用されていて今回の原発事故においても重大な局面での確で迅速な判断を迫られたはずで、また震災以前にも防災の面から技術的な判断を下して何らかの対処を講ずる機会が何度もあったはずで、それが果たしてどうだったか。最近の原子力安全基盤機構の調査ではそれが全く不十分であつたと判明しました。技術者が日常

向上心を持って技術と向かい合っていれば、あるいは科学技術的な帰結に対して技術者としての良心を持っていけば、福島原発事故は今回のようなあまりにもひどい惨状を呈するに至らなかったということとです。技術者としての堕落があつたと見るべきでしょう。

日本が、一九七〇年代から八〇年代にかけてジャパン・アズ・ナンバーワンと言われ、技術立国を成し遂げたと思われた頃に比べると、それから何年か経って、少しずつ技術者の劣化と墮落が見られるようになってきたのではないかと考えられます。これまでも工場などの事故や火災が見られるようになっておりました。福島原発事故はそれが重大な形で現れたと見てもおかしくありません。日本がこのようなことを排して今後も技術立国を継続してゆくためには、技術者が、知的良心と向上心、そして技術者としての良心を持って任務に当たってゆかなければならないと思ふのです。

原発事故の収束がままならない中で、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）加入に関する国を二分する議論がありました。TPPに賛成する人は、アジアの成長する市場を取り込むことが重要と言っ

ておりましたが、これからの日本の技術的優位が自動的に果てしなく続いてゆくと考えているかのようです。これからの日本が貿易立国を堅持できるかは一に独創的で開発能力の高い技術者をどれだけ多く抱えることができるかに掛かっています。ところがそれも、教育の問題ではあるのですが、今は危なくなっています。政治家や評論家はそういうところを見ないで発言を繰り返しているにすぎないのです。これからは日本の市場が中国やインドに奪われていってもなんら不思議ではありません。現状を座視して何も手を下さないのなら、日本は貿易立国どころか、農業国にシフトしたほうが良いと思われるくらいです。

小生はあと一年で退職しますのもうすぐ事務局の担当を後任に譲る予定です。これからはこの仕事を離れますが、会員が持てる力を存分に発揮して企業を支え、学界を支え、技術と学問を進展させるところを見守ってゆくことができれば望外の幸せであります。

